

乳幼児教育学会 自主シンポジウム
「幼児期の社会性発達を支える保育実践とは」
話題提供

対人的葛藤場面における感情経験

被害者が自己の場合と他者の場合での評価の比較

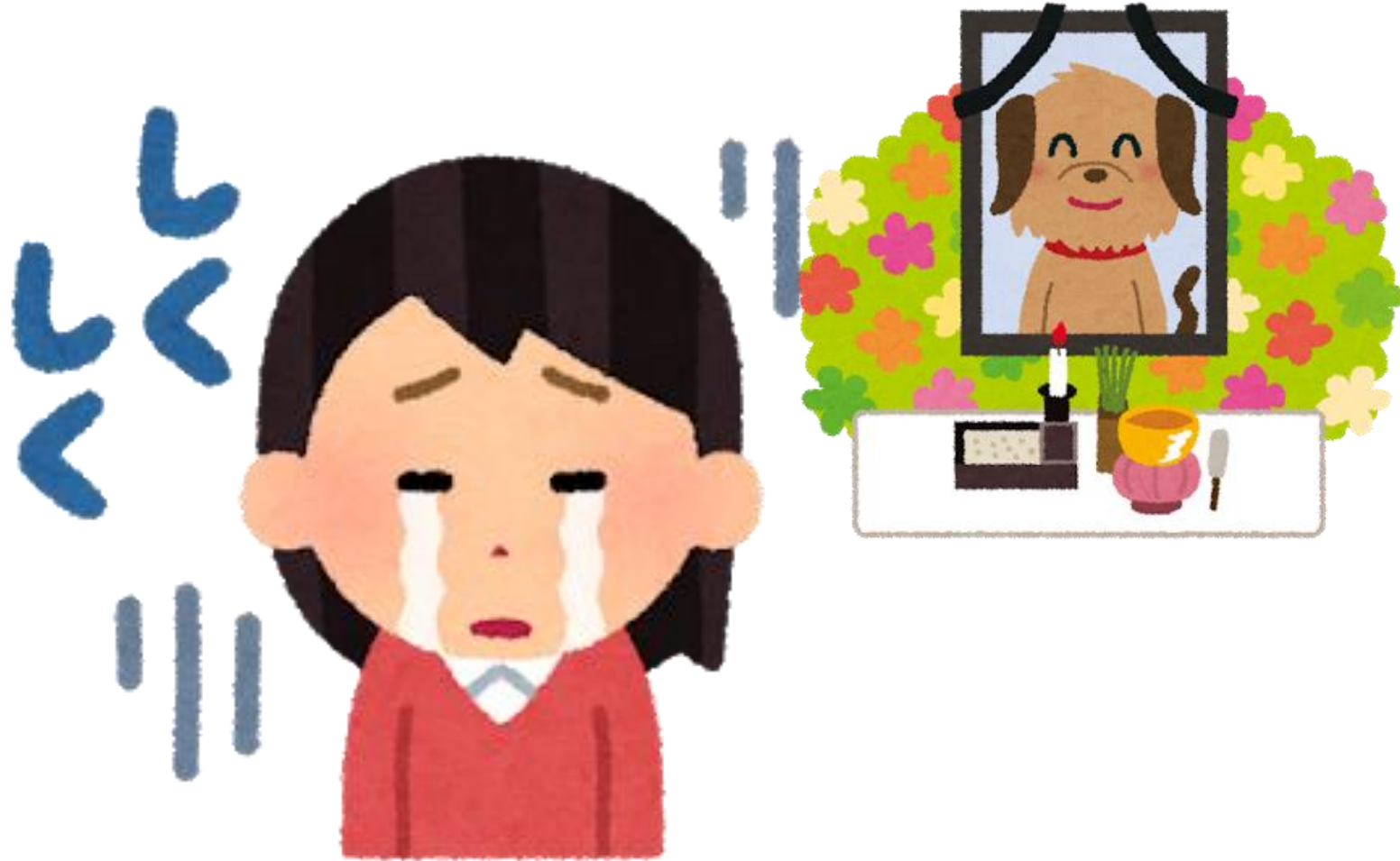
東京大学大学院 教育学研究科 浜名 真以

子どもの感情の理解能力は幼児期に飛躍的に進む

- 特定の状況で経験する感情を推論させる
- 図版や人形劇で場면을提示，主人公の感情について質問
(e.g., Michaelson & Lewis, 1985; Denham, 1986)



花子ちゃんはどうな気持ち？



子どもの感情理解

自分の感情の理解

=

他者の感情の理解？



【自己条件】 ママとパパが映画を見に行って、あなたが一人になってしまったら？あなたはどんな気持ち？

【他者条件】 花子のママとパパが映画を見に行って、花子が一人になってしまったら？
花子はどんな気持ち？

(Karniol & Koren, 1987)



子どもの感情理解

- ・ 他者条件に比べ自己条件で，幼児はネガティブな感情を推論しにくい
- ・ ネガティブな状況をポジティブに変えるような言及をしやすい



私は嬉しい気持ち

なぜなら，
友達を呼べるから



研究1：なぜ子どもは他者条件に比べ自己条件でネガティブな感情推論をしにくいのか？

研究2：母親はどのような言葉がけをしているのか？

なぜ子どもは他者条件に比べ自己条件でネガティブな感情推論をしにくいのか？

★子どもがネガティブ感情を経験する場面として対人的葛藤場面を取り上げる

■状況の評価

- ・加害者の意図に対する評価
- ・被害者の困難さに対する評価
- ・被害者の対処能力に対する評価

方法

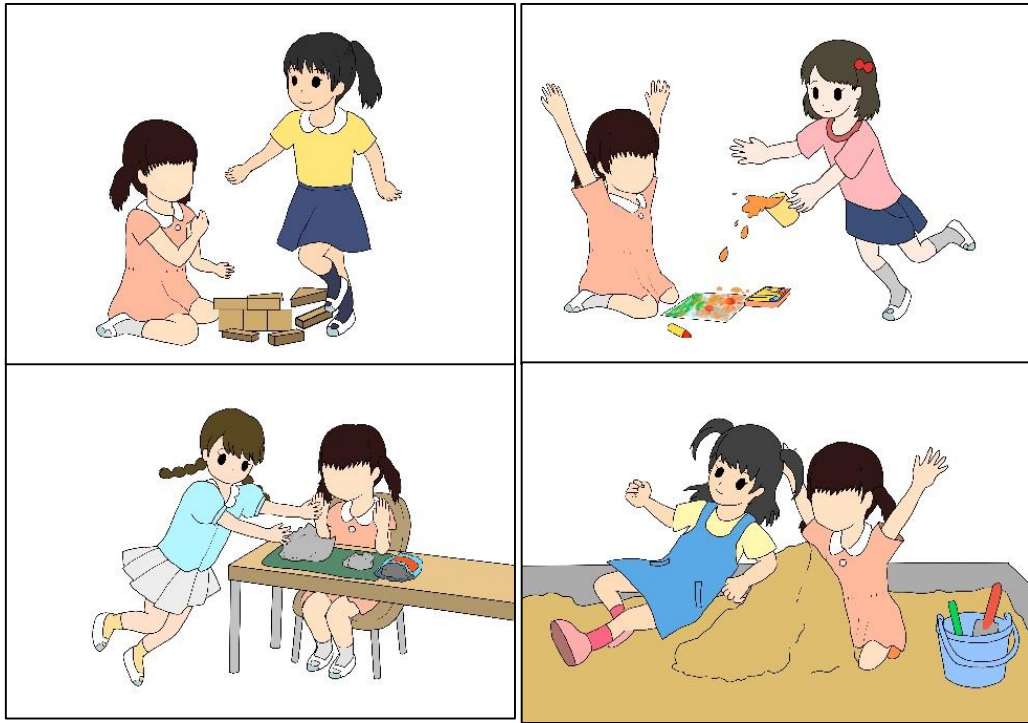
参加者 4～6歳の幼児56名（平均年齢 5歳3か月）



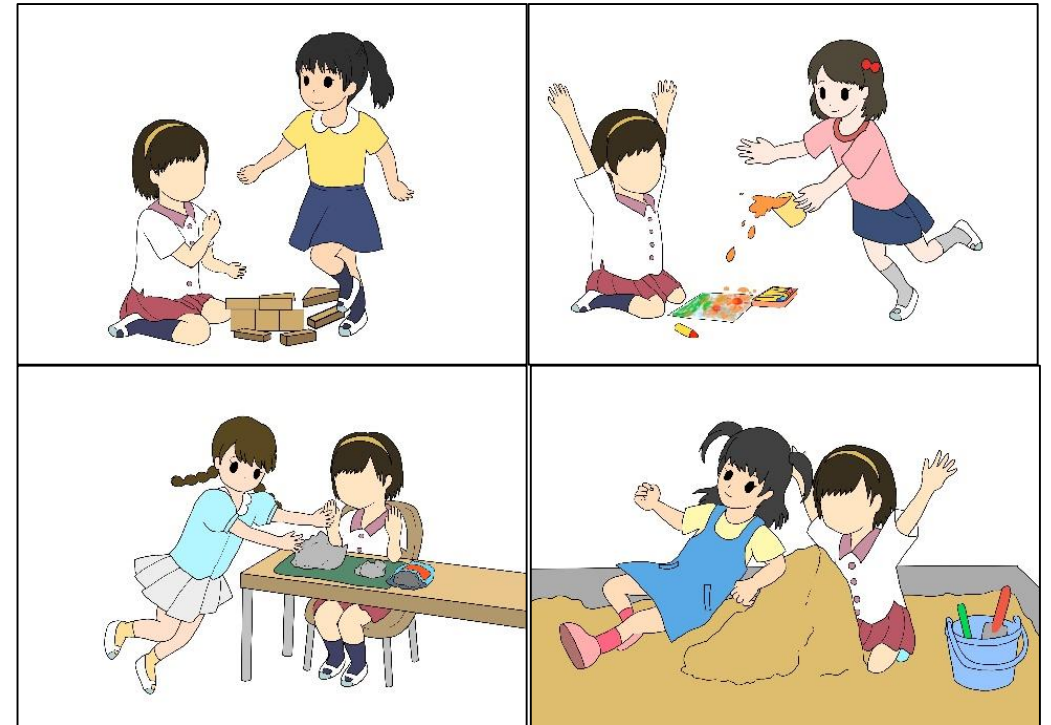
方法

材料 4状況 × 2条件(自己・他者)

<自己条件>



<他者条件>



質問

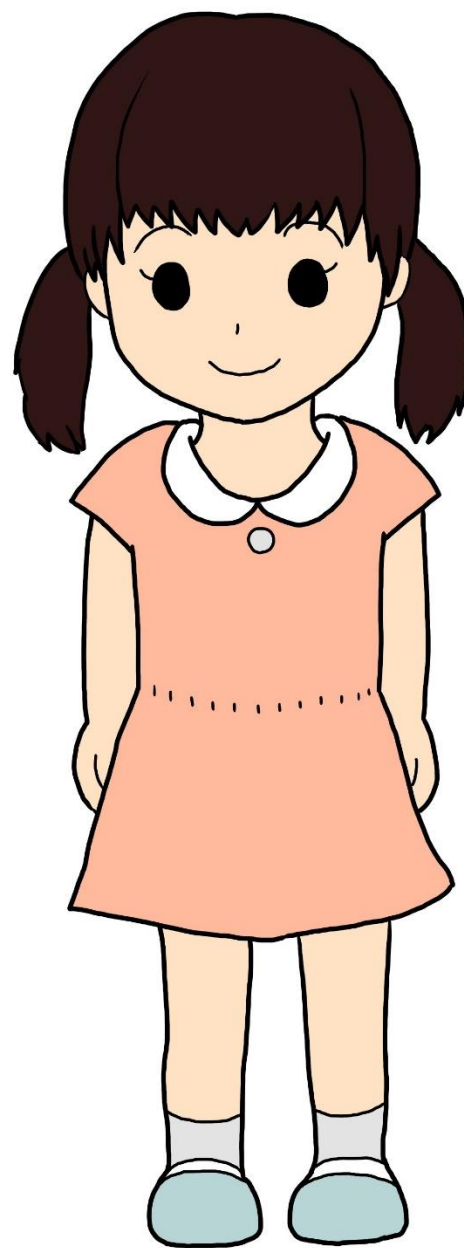
【加害者の意図】 お友達は〇〇ちゃんにどれくらい意地悪してやろうと思ったかな？

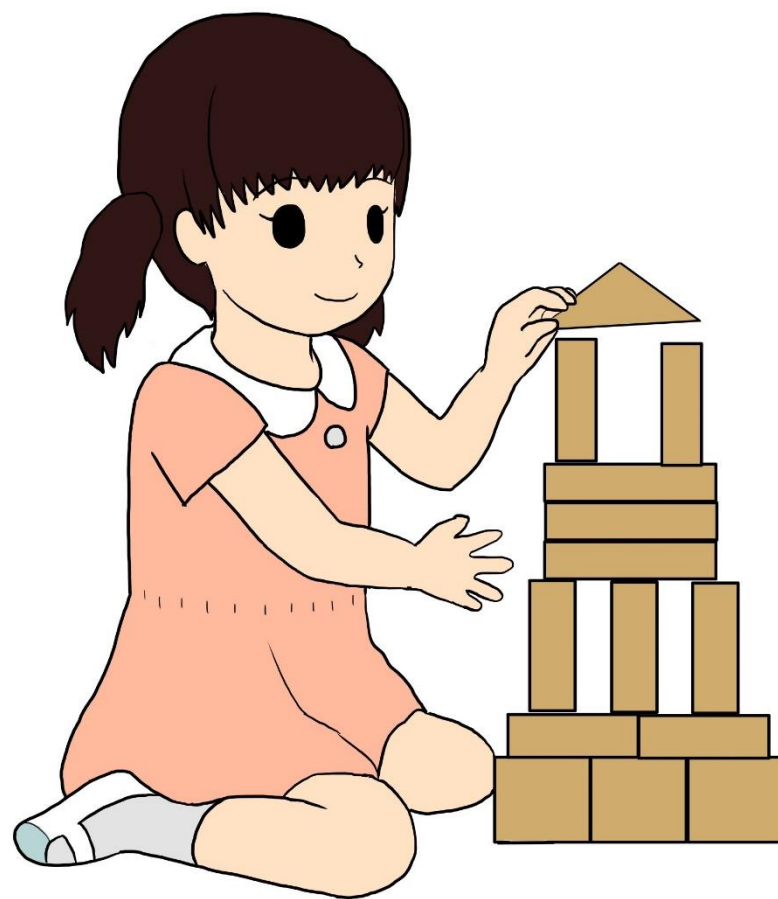
【被害者の困難度】 〇〇ちゃんはどれくらい困るかな？

【被害者の対処能力】 〇〇ちゃんは元通りに直すことができるかな？

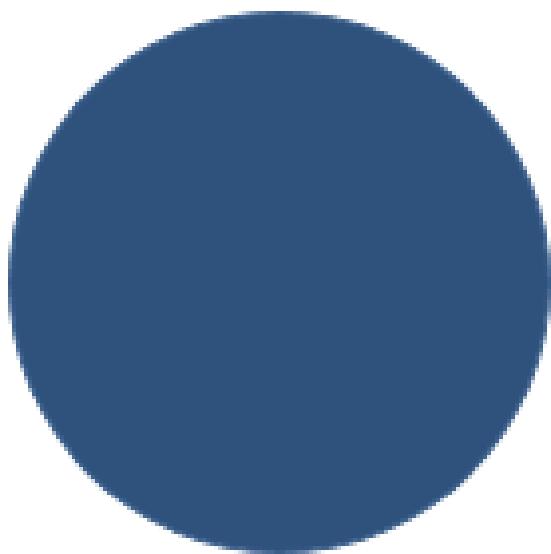
【被害者の感情】 〇〇ちゃんはどれくらい悲しい/怒るかな？

➡得点化: 1～4



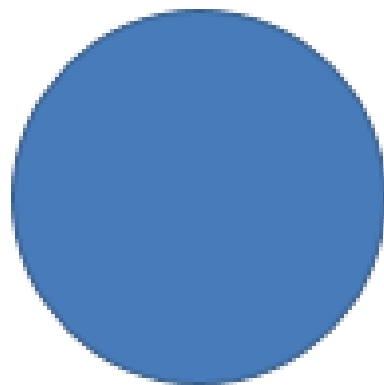




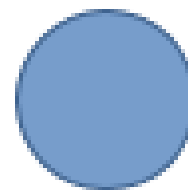


得点:

4



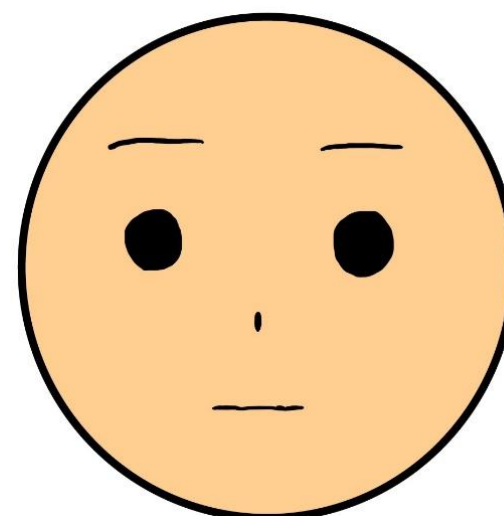
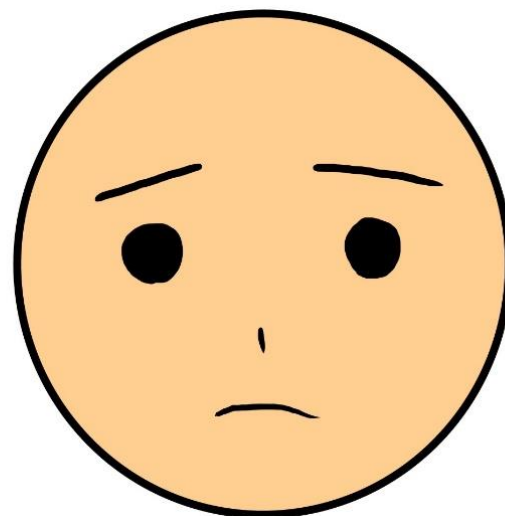
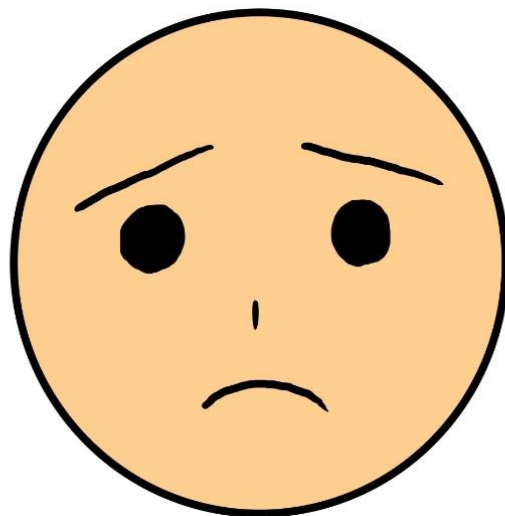
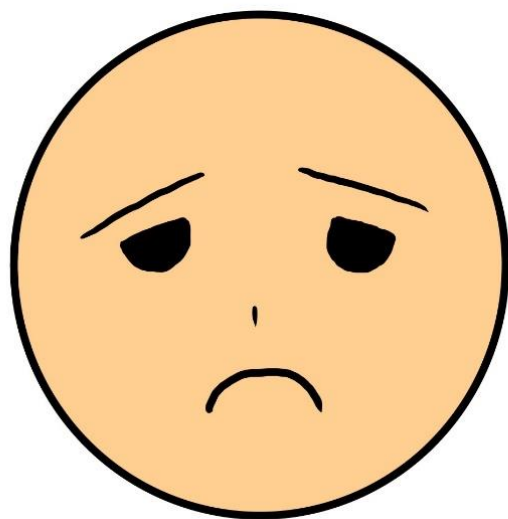
3



2



1



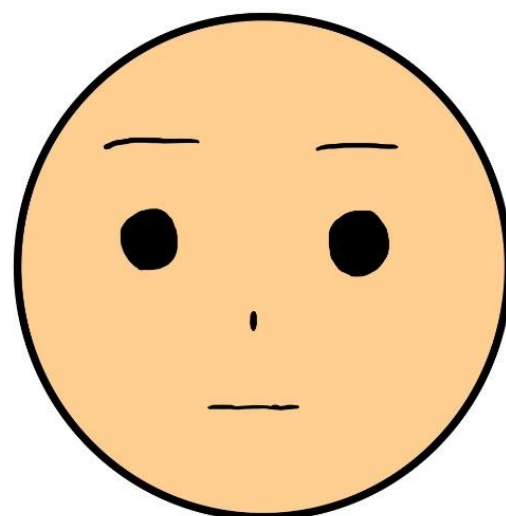
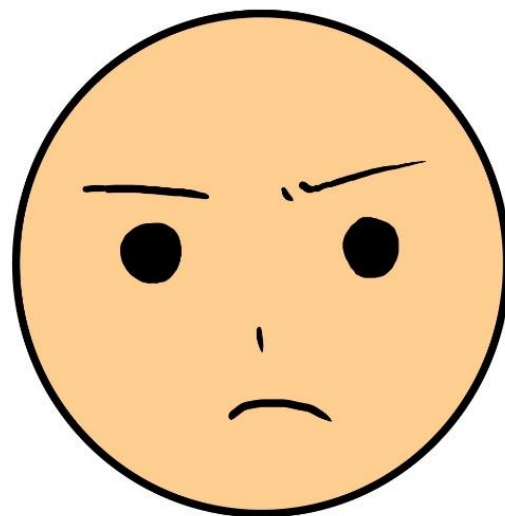
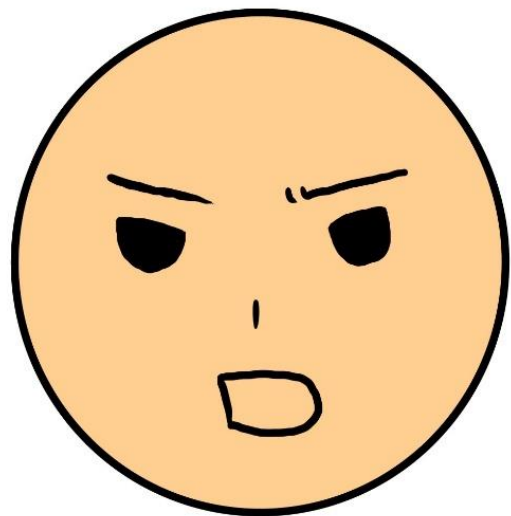
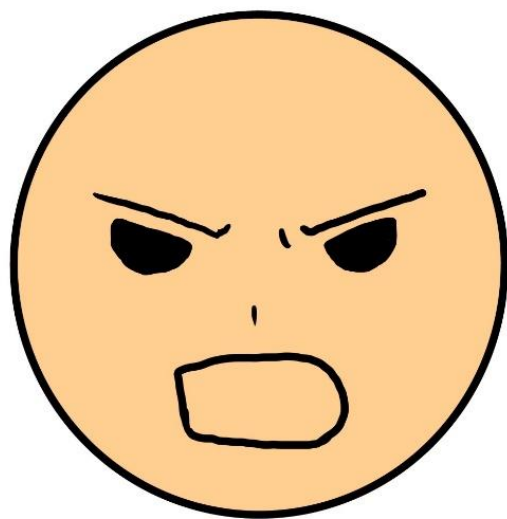
得点:

4

3

2

1



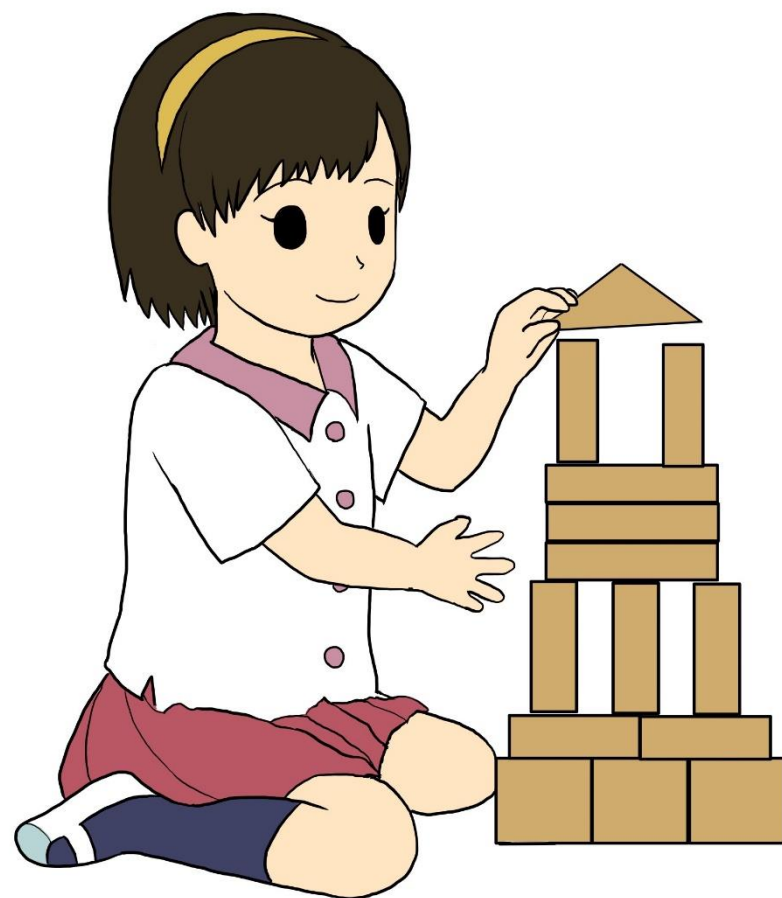
得点:

4

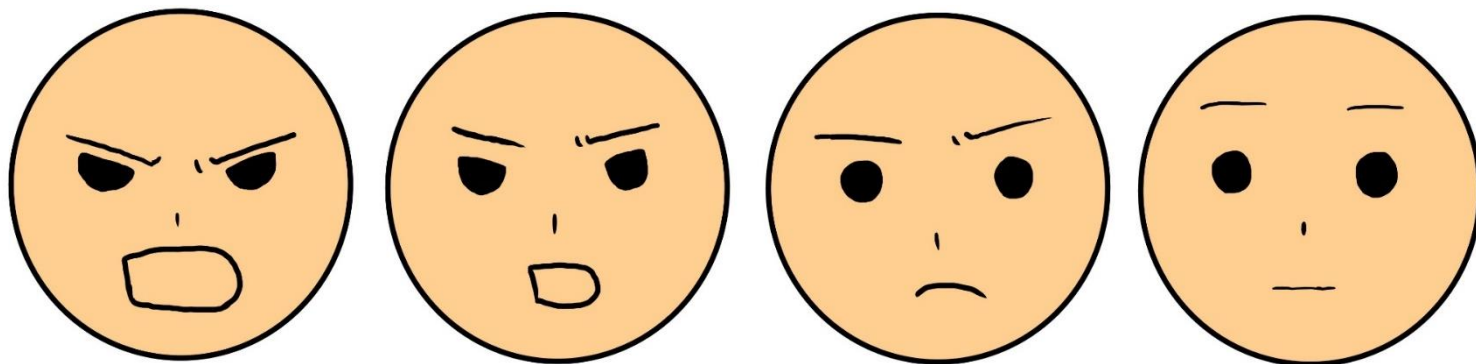
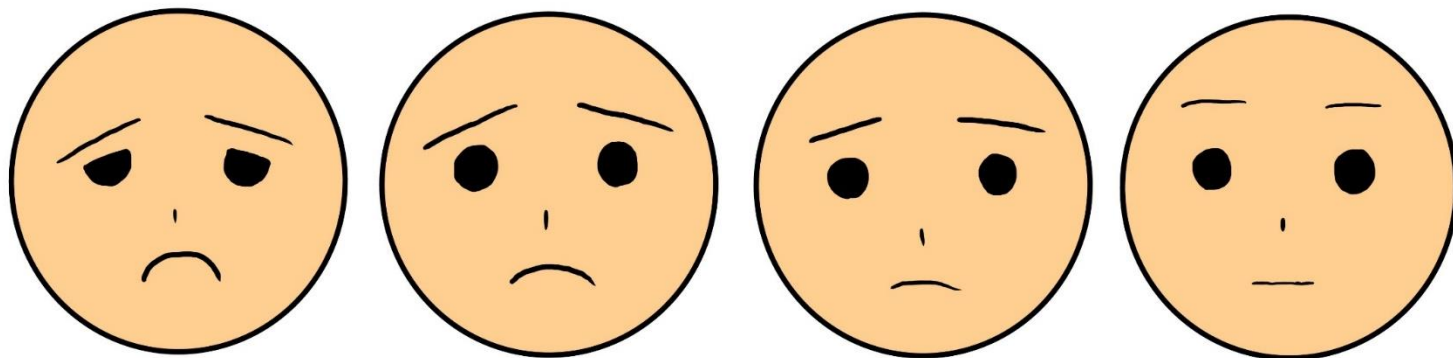
3

2

1







得点: 4 3 2 1

結果

		自己条件		他者条件	
		平均値	<i>SD</i>	平均値	<i>SD</i>
加害者の意図	自己先行	2.75	1.03	2.68	0.94
	他者先行	2.45	0.98	3.00	0.82
被害者の困難度	自己先行	2.61	1.04	2.83	0.91
	他者先行	2.53	0.99	2.90	0.79
被害者の対処能力	自己先行	3.55	0.67	3.14	0.81
	他者先行	3.16	0.84	3.00	0.89
悲しみ	自己先行	2.02	1.06	2.67	0.96
	他者先行	2.44	1.04	2.71	0.89
怒り	自己先行	2.15	1.04	2.69	0.88
	他者先行	2.70	1.02	2.74	0.84

結果

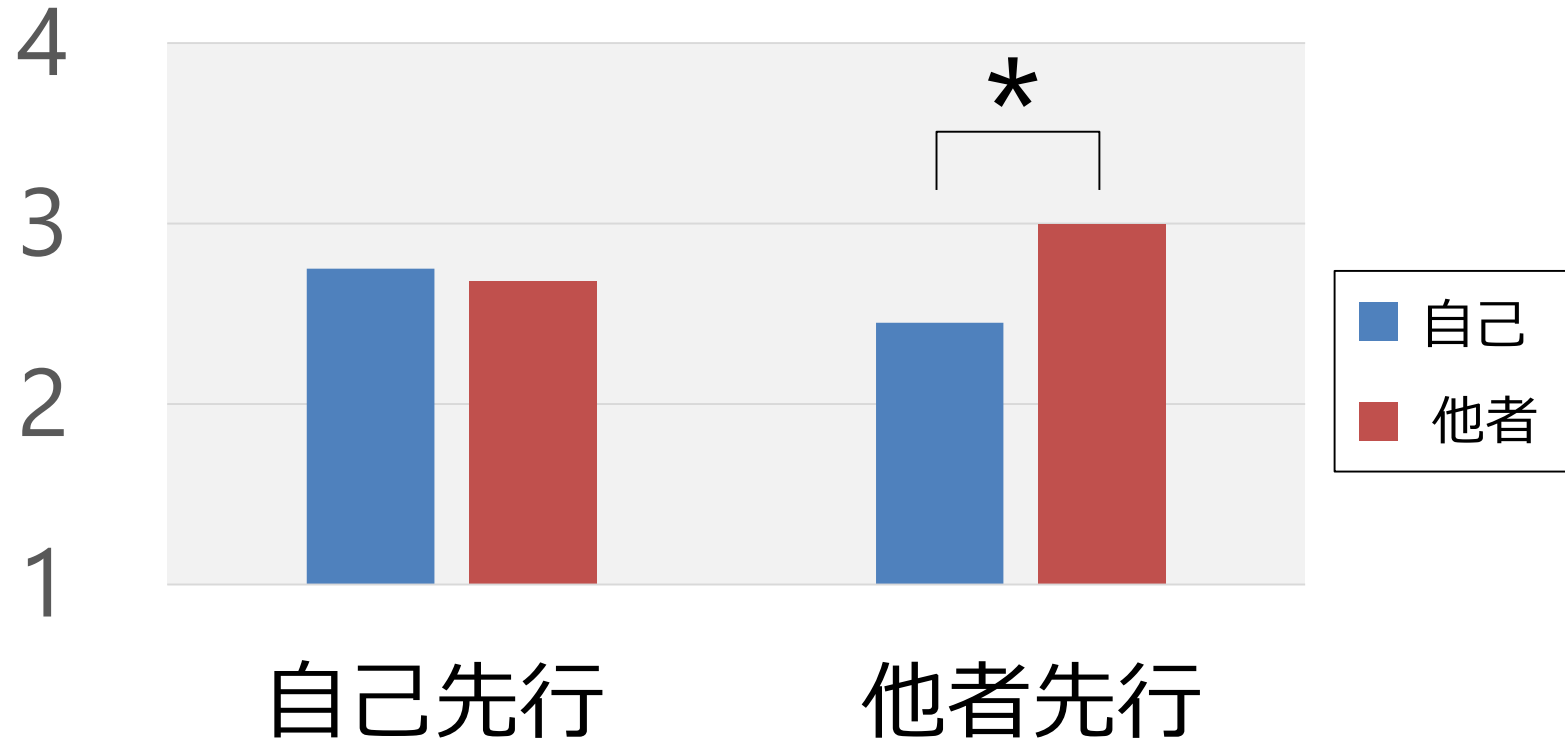
分散分析

- **従属変数**：加害者の意図，被害者の困難さ，対処能力，悲しみ，怒り
- **独立変数**：条件（参加者内：自己，他者）× 順序（参加者間：自己先行，他者先行）

※性差，年齢差は見られなかった

結果

加害者の意図

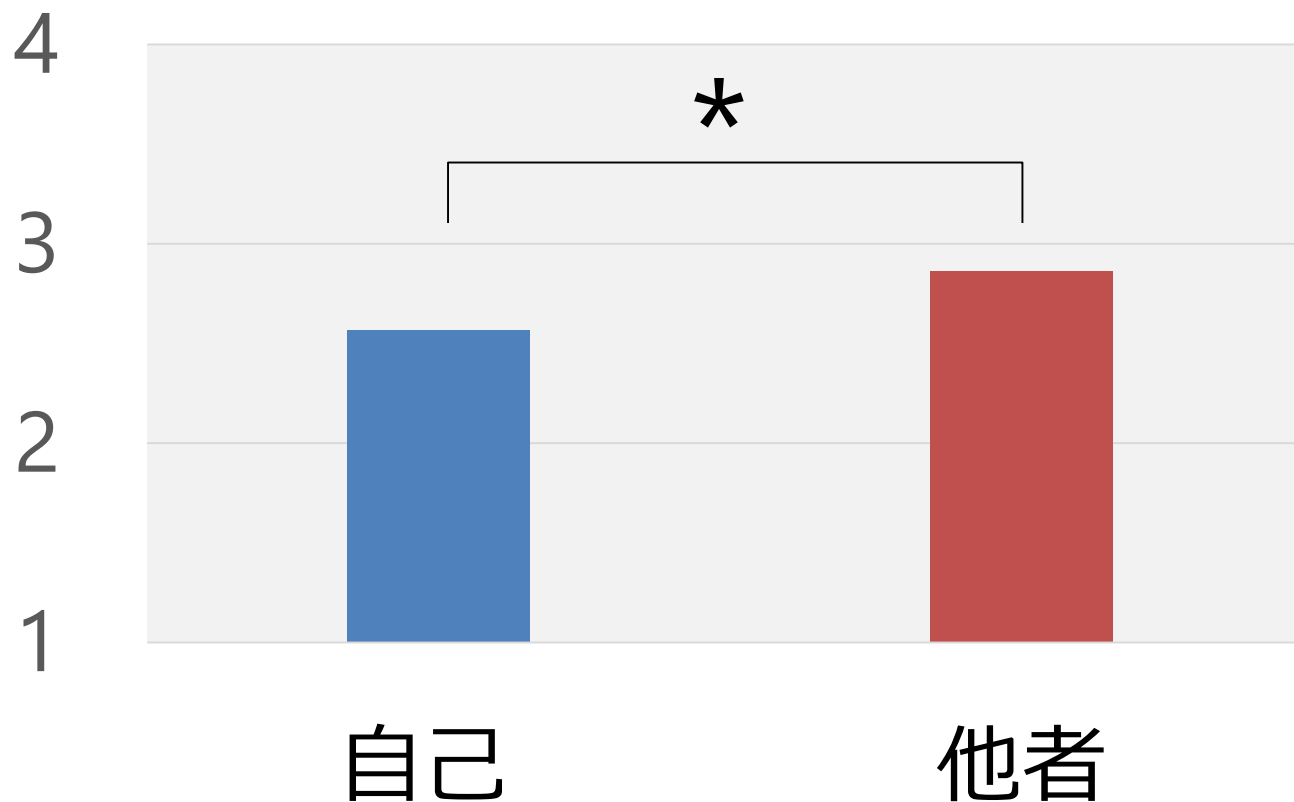


条件 × 順序の交互作用

$F(1, 54) = 5.60, p < .05, \eta^2 = .03$

結果

被害者の困難度

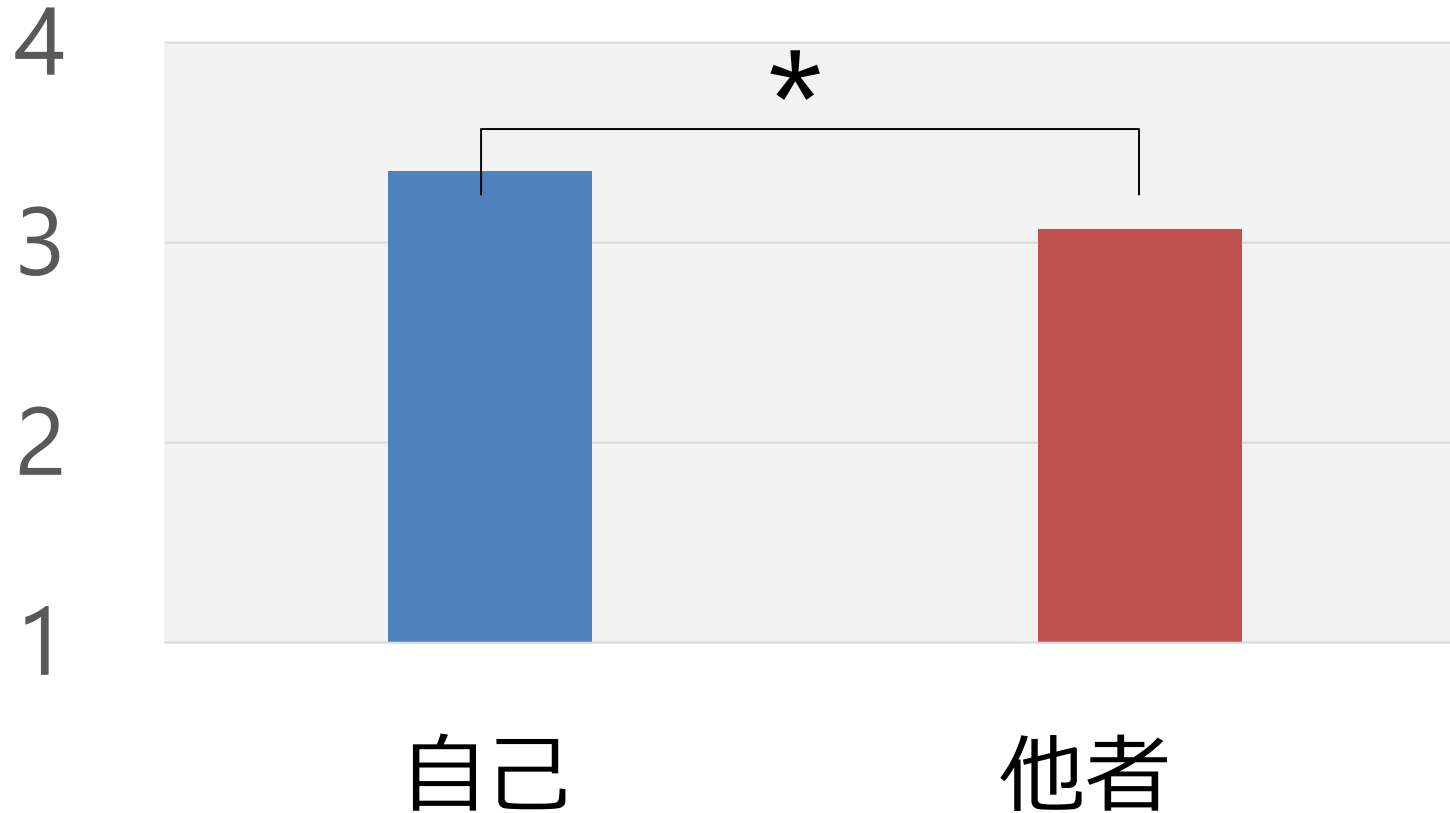


条件の主効果

$$F(1, 54) = 5.63, p < .05, \eta^2 = .03$$

結果

被害者の対処能力

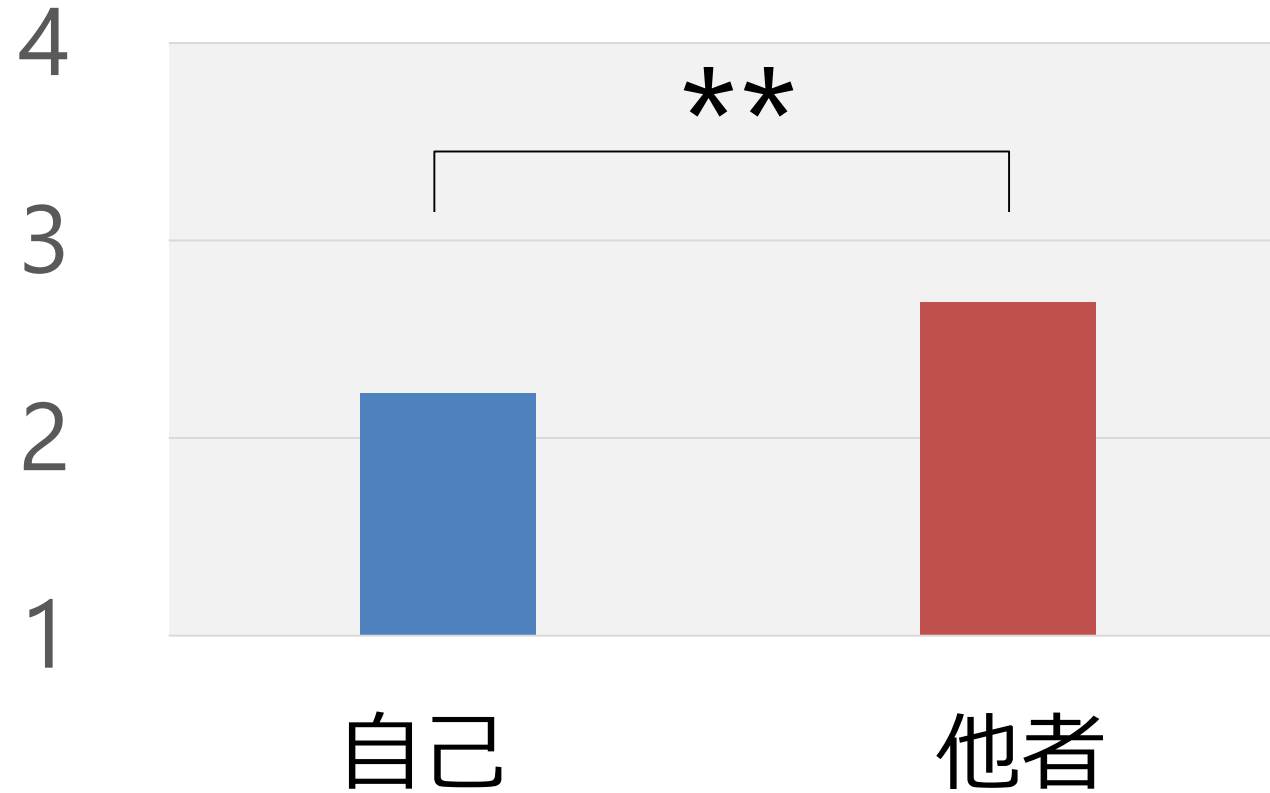


条件の主効果

$$F(1, 52) = 4.75, p < .05, \eta^2 = .03$$

結果

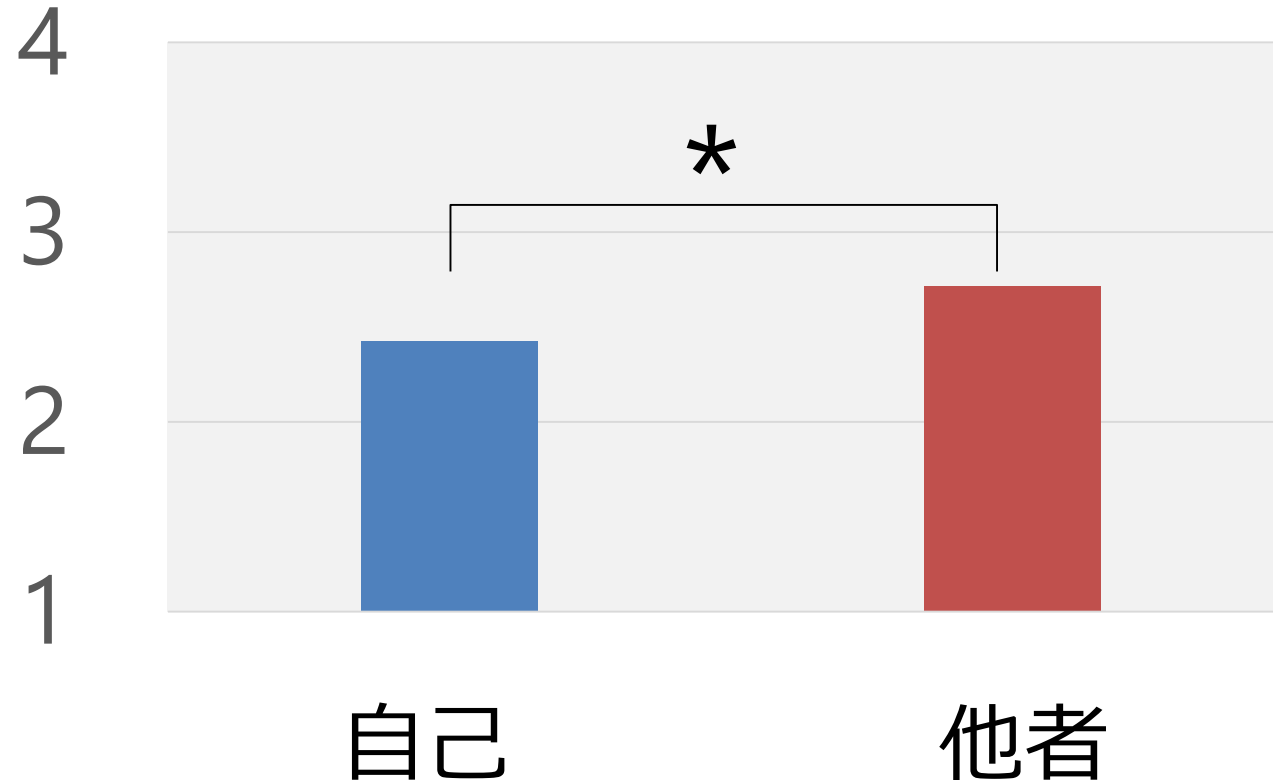
被害者の悲しみ



条件の主効果

$F(1,54) = 8.47, p < .01, \eta^2 = .05$

被害者の怒り

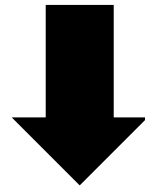


条件の主効果

$$F(1, 54) = 4.70, p < .05, \eta^2 = .03$$

考察

- 自分が遭遇するネガティブな状況に対する楽観視
- 自己の対処能力に関する有能感



- 自分が困難に巻き込まれ傷つくことを恐れない積極性
- 被害者への向社会性

研究1：なぜ子どもは他者条件に比べ自己条件でネガティブな感情推論をしにくいのか？

研究2：母親はどのような言葉かけをしているのか？

幼児は、他者に比べ自己の方が、ネガティブな状況を楽観的に解釈し、対処能力に関する有能感を持つ（研究1）

→このような幼児の捉え方に母親の言葉がけが影響を与えている？

子どもがネガティブ感情を経験している際の母親による言葉がけの特徴

- ・ 自分の子どもが経験するネガティブな状況について自分の子どもに話す場合(**自分の子ども条件**)
- ・ 他の子どもが経験するネガティブな状況について自分の子どもに話す場合(**他の子ども条件**)

→母親は他の子ども条件に比べ、自分の子ども条件で、ネガティブ感情への対処に言及しやすい？



方法

対象者 3-6歳児の母親50名(Mage=38.5か月,SD=4.5)

手続き 質問紙調査を実施

悲しみ場面

怒り場面

【自分の子ども条件】

あなたの子どもがイラストの男／女の子のような状況にいたら、あなたはあなたの子どもにどのように話しかけますか？

【他の子ども条件】

あなたの子どもの友達（ほみくん／ほみちゃん）がイラストの男／女の子のような状況にいたら、あなたはあなたの子どもにどのように説明しますか？

対処発話

例「車のおもちゃを直そう」「他のところで遊ぼう」

…うち, **介入発話** 例「ほみちゃんと一緒に修理しようか」

-
- ・場面ごとに, 対処発話をカテゴリーに分類
 - ・各カテゴリーの発話を産出した人数をカウント

母親による言葉かけの特徴

- 自分の子ども条件では、対処発話を産出しやすい
 - ➡ 子どものネガティブ感情への対処に関する有能感
- 他の子ども条件では、ネガティブ感情を経験している他の子どもへの介入方法を教えている
 - ➡ 子どもの向社会性

保育実践に向けて

- 子どもの自他の感情理解，感情への対処に関する有能感には，大人からの言葉がけが影響している
- 今後は，母親の言葉がけの個人差と，幼児のネガティブ感情への対処に関するとらえ方の個人差の関連を検討



本研究は、JSPS科研費（16J04249）の助成および東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターSEED研究助成支援を受けました。

Table 2 自己条件における質問間の得点の相関

	被害者の感情強度	
	悲しみ	怒り
加害者の敵意	.47***	.42**
被害者の能力		
困難度	.65***	.53***
復元能力	-.20	-.16
被害者の感情強度		
悲しみ		.45***

** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 3 他者条件における質問間の得点の相関

	被害者の感情強度	
	悲しみ	怒り
加害者の敵意	.51***	.41**
被害者の能力		
困難度	.66***	.53***
復元能力	.00	.09
被害者の感情強度		
悲しみ		.61***

** $p < .01$, *** $p < .001$